

P1-50-7 当院における妊娠中に発症した静脈血栓塞栓症の検討

岐阜大¹, 高山赤十字病院²寺澤恵子¹, 豊木 廣¹, 竹中基記¹, 岩砂智文², 森重健一郎¹

【目的】妊娠中に発症した静脈血栓塞栓症について調査すること。【方法】8年間で妊娠中に発症した静脈血栓塞栓症(VTE)10例を対象とし、その臨床的背景、治療方法、転帰を後方視的に検討した。【結果】肺血栓塞栓症(PE)は4例、深部静脈血栓症(DVT)は6例であった。診断時の平均妊娠週数は13.4週(8~26週)、平均年齢は35歳(31~39歳)、初産5例、多胎妊娠1例、妊娠悪阻は4例であった。BMI28以上の肥満は認めなかった。血栓素因が明らかになったものはプロテインS徳島1例で、静脈血栓塞栓症既往は1例に認められた。初発症状は下肢の腫脹4例、疼痛4例、腫脹と疼痛が2例であった。医療機関受診までには平均6.2日(0~21日)を要し、受診理由は症状の悪化が8例で、そのうち疼痛の悪化が6例であった。PE症例のうち呼吸苦を訴えたのは1例で、他3例は胸痛や呼吸苦を認めず、下肢の腫脹と疼痛のみであった。治療は全例にヘパリンを使用し、下大静脈フィルター留置を8例に行った。血栓溶解療法は6例(ウロキナーゼ5例、組織プラスミノゲンアクチベータ1例)に行った。分娩転帰は人工妊娠中絶を選択する症例も認められたが、妊娠を継続した症例では全例正常産で母体合併症はなく、出生児にも異常は認めなかった。【結論】妊娠中に発症したPEを含むVTE症例に対して、適切な管理と治療を行うことにより、妊娠を継続し生児を得る事が可能であった。また、医療機関受診までに時間を要する症例が多かったため、早期に来院するよう患者教育を行う必要があると考えられた。

P1-51-1 子宮体癌術後のリンパ嚢胞に感染した劇症型G群溶連菌感染症の1例

公立昭和病院

竹内 真, 中山敏男, 鮫島大輝, 三宅友子, 山下亜紀, 谷川道洋, 北麻里子, 武知公博

【緒言】劇症型溶連菌感染症は突発的に発症し急激に敗血症性ショック、DIC、多臓器不全に至るきわめて致死率の高い感染症として知られている。子宮体癌術後のリンパ嚢胞に感染した劇症型G群溶連菌感染症を経験したので文献的考察を加え報告する。【症例】61歳 2経妊2経産。子宮体癌に対して準広汎子宮全摘、両側付属器切除、骨盤リンパ節廓清を施行。病理診断は類内膜腺癌G1, Stage Iaであり後療法なく経過観察していた。術後2カ月、40度の発熱を主訴に来院。血圧83/42mmHg、脈拍101回/分で、左下腹部に圧痛を認めた。血液検査では炎症反応高値(CRP27.4, WBC18900)、腎機能障害(Cre2.51, BUN58.7)、凝固異常(PLT5.5万, Dダイマー20, AT331%)を認め、単純CT検査にて左骨盤内に4cm大のリンパ嚢胞を認めた。以上より術後リンパ嚢胞感染による腹膜炎から、敗血症性ショック、DIC、MOFに至ったと診断した。直ちに緊急ドレナージ術を施行しICU管理とした。術後3日目、嚢胞内容物からG群溶連菌が検出され、劇症型溶連菌感染症の診断のもとにTAZ/PIPC+CLDMの投与を開始。抗DIC治療にてDIC、MOFも改善し術後8日目には一般病棟管理となった。術後24日目に嚢胞内洗浄を終了し、術後37日目には嚢胞内ドレーンを抜去、術後40日目に抗生剤投与を終了し、術後45日目に全身状態改善のため退院となった。【結語】劇症型溶連菌感染症は感染部位において急激に進行する壊死性筋膜炎や筋肉壊死が特徴である。子宮体癌の術後リンパ嚢胞に感染した劇症型溶連菌感染症は非常に稀であるが、子宮体癌術後に発症する報告も散見されるため、疾患の存在を念頭においた慎重な術後管理と迅速な診断が必要である。

P1-51-2 人畜共通感染症のパスツレラ菌が起炎菌となった子宮体癌術後リンパ嚢瘍の一例

日本医大

川瀬里衣子, 新村裕樹, 池田真利子, 田村俊之, 黒瀬圭輔, 鴨井青龍, 竹下俊行

パスツレラ菌は犬や猫に保有率が非常に高く、咬傷創から人に感染すると皮膚症状や呼吸器症状が出現する。近年のペットブームにより、犬や猫から人に感染するものとしてパスツレラ菌は最も患者数が多い感染症のひとつであるが、骨盤内嚢瘍から検出されたという報告は少ない。今回我々は、子宮体癌術後のリンパ嚢胞感染の起炎菌として、人畜共通感染症であるパスツレラ菌が検出された一例を経験したので報告する。症例は61歳1経妊0経産。子宮体癌にて骨盤リンパ節廓清を含む根治術後で、7cm大のリンパ嚢胞をフォロー中であった。術後5カ月目、39℃台の発熱にて近医で処方を受けるも改善せず、当科を受診した。来院時は右下腹部に広範囲に紅斑を認め、血液検査ではWBC18600/μl, Hb11.7g/dl, CRP26.35mg/dl, CA12594.6U/ml, CA19-96.3U/mlであった。CEZ, CLDM点滴治療を開始するも炎症所見の改善が得られず、CTガイド下ドレナージを施行したところ徐々に改善傾向がみられた。嚢瘍内溶液からPasteurella multocidaが検出された。自宅で犬1匹および猫1匹を飼育していた。リンパ嚢胞感染の起炎菌として、人畜共通感染症であるパスツレラ菌が検出された一例を経験した。嚢瘍となった場合、内科的治療のみで改善することが困難な場合が多く、ドレナージが有用であった。基礎疾患を有する場合、ペットとの関わり方にも注意が必要と思われた。